

〔発言者〕 谷口稜曄

〔発言年月日〕 1970 年

〔生年、被爆地、職業など〕 長崎で被爆。

〔内容〕

二十五年前の八月九日、私は住吉町の路上に赤い自転車を走らせていた。電報配達員になって二年め、一六歳だった。

運命の一瞬、目のくらむような閃光、左後方からのはげしい爆風で、私は三メートル先の路上にたたきつけられ、自転車は飴のようにまがっていた。不思議に痛みも出血もなかった。三百メートル先の兵器工場の地下壕にたどりついた。そのとたん、ひきつるような痛みが背中から全身をおそった。(中略)

忘却が、新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れる。私は、かつての自分をもそのひとコマに含めたカラーの原爆映画をみて、当時の苦痛と戦争に対する憎しみが自分の体の中によみがえり、広がってくるのを覚える。私はモルモットではない。もちろん見せ物ではない。だが、私の姿を見てしまったあなたは、どうか目をそむけないで、もう一度よく見てほしい。私は奇蹟的に生きのびたが、今なお私たちの全身には原爆の呪うべき爪痕がある。私は、じっと私たちを見つめるあなたの目のきびしさ、あたたかさを信じたい。

〔注〕

この言葉が収録される証言誌の表紙には、アメリカ軍により撮影された背中に火傷をおった少年期の谷口稜曄さんの写真が掲載されている。25 年を生き抜いた被爆者が、周囲の視線をうけとめ、長年にわたる心理的な葛藤をへて、体験を語りだす心境が表現されている。

(『長崎の証言 1970』長崎の証言刊行委員会編、1970 年所収)